

平成 28 年度 青少年教育施設を活用した国際交流事業

「ジャパン・マレーシア交流プロジェクト 2016」

～Change the World in our EXCHANGE～

高校生 大いに語れ！～まほろばから世界へ～



1. ねらい

- ・ マレーシアの高校生との交流の振り返りをする。
- ・ 参加した高校生同士が交流を深める。
- ・ 交流事業をとおして考えたことや感じたことを意見交換し、互いの考え方を理解しあう。
- ・ 国際社会の一員として、相互理解を促進する方法について考える機会をもつ。
- ・ 国際化が進む社会の中での自分の将来や夢について考える機会をもつ。

2. 実施日

12月23日（金・祝）～12月24日（土）1泊2日

3. 対象者

国際交流に興味のある高校生

4. 参加者 / 募集定員

31人 / 30人

5. プログラム（要約）

本事業は、「ジャパン・マレーシア交流プロジェクト2016」～Change the World in our EXCHANGE～（以下「ジャパン・マレーシア交流プロジェクト」という。）の普及啓発を目的とした取組で、マレーシア高校生と交流した高校生実行委員会が中心になり、気付いたことや感じたこと、考えたことを交流し合い、グローバル化が進む中で、自分の将来や夢について考える機会となることをめざして開催した。講師としてマレーシア政府観光局大阪支局 アブドゥル・ラーマン氏、日本語パートナーズとして9月までマレーシアの高校で日本語の指導に当たっていた鶴谷有沙氏、白鳳短期大学総合人間学科国際人間学専攻日本語非常勤講師 辰巳委子氏の3名、また、ゲストコメンテーターとして、白鳳短期大学で学ぶ東アジア3カ国からの留学生4人を招き、様々な観点からアドバイスをいただくと共に参加した高校生たちが自由に語り合える時間をもった。

スケジュール

12月23日（金・祝）1日目

アイスブレイク

実行委員会活動・マレーシア高校生との交流の振り返り・フリートーク

12月24日（土）2日目

パネルディスカッション

ダイアログ

12月23日（金・祝）【1日目】

開会式では自然の家所長の挨拶の後、講師、ゲスト、職員、実行委員及び一般公募で集まった高校生がそれぞれ自己紹介を行った。

その後のアイスブレイクは、実行委員が考えたゲームで交流を行った。マレーシアスタイルのじゃんけんゲームなどを通して、交流を深めた。



夕食後は、ビデオ映像で今年度の

「ジャパン・マレーシア交流プロジェクト」のふりかえりを行った。実行委員は参加者に事業の様子を説明しながら、交流を思い出していた。その後、実行委員一人一人が実行委員会の活動や派遣事業、受入事業などを通して学んだことを語った。特に2年目の実行委員からは、昨年の悔しさが今年につながってきたことや、2年目のメンバーがこの実行委員会を引っ張っていかなければならないという強い思いを持って活動してきたことが聞かれた。1年目の実行委員からは、「楽しかった」という思いと「来年もやりたい」という思いが多く聞かれた。



1ヶ月にたった1回だけ、様々な高校の生徒が集まって、一つの目的に向かって活動する実行委員会に来ることの楽しさを感じたという感想もあり、実行委員同士の横のつながりの深まりが感じられた。ふりかえりの後は入浴を挟んで、再び全員が一堂に会し、フリートークで交流を深めた。夜遅くまで思い思いの話題で話し込んでいた。

12月24日（土）【2日目】

午前中は、実行委員の5人がパネラーとなり、パネルディスカッションを行った。テーマは実行委員が交流を通して学んだことをもとにしたもので「日本で英語を学ぶなんて意味なし」「今の日本は戦争中だ」「日

本の若者に宗教は必要だ」「世界に言語は1つだけではない」「生まれた時点でリーダーになるかは決まってる」というパネルに対して、参加者の「Yes」、「No」の回答とその根拠となる意見をもとにして積極的にディスカッションが行われた。



パネラーからテーマに対する考えを聞いた上で、参加者からも「Yes」、「No」の根拠となる意見が出され、それらの意見を聞き、自分の考えを「Yes」から「No」に、「No」から「Yes」に切り替える場面もあり、テーマに対して真剣に考えながら向き合っている様子が印象に残った。

午後は、実行委員が今みんなで語り合いたいことを提示し、グループに分かれて語り合うダイアログを行った。

提示されたテーマは「過去か未来どちらに行きたい」「天国と地獄は存在するのか」「休みがあったら何をやる」「この夜からスマホがなくなったら何をやるか」「もしも能力を1つだけ手に入れられるならどんな能力」「もし生まれ変わるなら何になりたい」の6つで、それぞれの5～7人のグループで協議を行い、最後に各グループでの内容について共有する時間をとった。

閉会式では自然の家次長から、2日間での交流を含め、春から活動してきた実行委員に対してのねぎらいの声かけがあり、参加した実行委員も最後の活動となるこの事業（高校生大いに語れ）が終わるのを惜しんでいた。



行委員会（日帰り7回、宿泊1回）と、半数の実行委員が出向いた8月の派遣事業、全員で関わった11月の受入事業を通して、交流を行ってきた。その中で、実行委員は国際交流にはどんな力が必要なのかを考え、学んだ。言葉が通じなくても、宗教が違って、生活習慣が違って、お互いに伝えようとする、分かるようとする気持ちをもつことがコミュニケーションへの手掛かりであることを体験した。そしてそのことを通して、実行委員同士も信頼関係を築くことができた。この事業を通して学んだそのような内容を広く同世代に発信していきたいと考え、この「高校生 大いに語れ！」において、学びの共有と発信を目指した。

パネルディスカッションにおいてパネラーとなった実行委員はもとより、ダイアログでの話題を提供してくれた実行委員も含めて、すべての実行委員が「ジャパン・マレーシア交流プロジェクト」で学んだことを、一人でも多くの参加者に伝えようとする気持ちを強くもって取組んだことで、一般参加の高校生から「もう少し早くにジャパン・マレーシア交流プロジェクトのことを知って参加したかった。」「来年も必ず参加したいです。本当に最高の事業です。」「たった2日だったけど、メンバーのみんなが大好きになったし、来年参加してみたいと強く思いました。みんなが1年間通して学んできたことも知れたし、ディスカッション、ダイアログもたくさん語れて本当に楽しかったです。」「というアンケートへの記述があった。実行委員からは、「来年も参加してみたいです。」「自分が普段考えないことを考える機会がたくさんあって、とても充実した2日間でした。これから成長していかなければならないことも知ることができたので、今後も生かしていきたいです。」「一人一人違った価値観や意識の深さを知れて良かった。」「という記述があった。

今年度のジャパン・マレーシア交流プロジェクトでは前年度までの学びの上に立ち、国際交流事業を通して、様々な価値観を受け入れ、その中で何が大切なことなのか考え判断する力を身に付け、世界的な視野をもった次世代リーダーを育成することをめざして取り組んできた。この事業での2日間でも、様々な人の考え方を聞く場面があり、また、自分の考えを発信できる機会もたくさんあった。そのことを通してどんな姿勢で聞けばいいのか、また、どのように発信すればいいのかを学んだ。今後、この事業で身に付けた力を様々な場面で発揮し、この事業に参加したメンバーから次世代リーダーが育っていくことを期待する。

（主任企画指導専門職 鈴口 真也）

6. まとめ

今年度は奈良県内の高校11校から24名が実行委員としてこの事業に関わってきた。5月に1回目の実行委員会を行ってから、12月までの間、8回の実